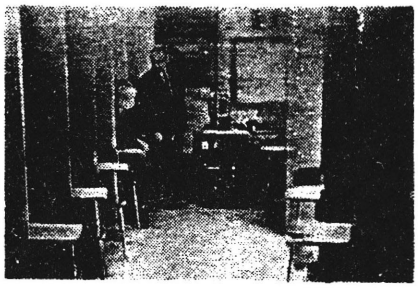
Harvard Graded Direct Method Teachers' Group
News Bulletin

第 12 号　英語教授法通信　1963年 6 月30日

Harvard Graded Dircet Method Teachers' Group　代表者　吉沢　美雄
会計　高橋美智　顧問　阿江美智子
事務局　升川潔　編集者　片桐ユズル
東京都新宿区百人町 2-223 大久保英会話内
英語教授法研究会事務局 Tel. (371) 6573

25

升川　潔



今年の2月25日にボストンについた時は，10°F(−12°C)で，まだ街には雪がとけないで氷になって残っていた。寒さのために鼻とホオがチカチカして持っていた下着は全部きて，ボストン郊外のハーバード大学へ行った。ハーバードの銅像のそばを通ってロータリーに出るとLanguage Research Inc.が見えて来た。長い歴史を物語る様な古びたレンガ造りを想像していたら大学の一偶に他の雰囲気とは少しちがってくすんだ黄色の木造の建物があった。もとの教育庁みたいに廊下を歩くとギシギシとウグイス張りだった。朝10時に会うことになっていたMiss Gibsonに早速お目にかゝった。テキサスできゝなれたマノビした調子とちがって英国くさい口調でテキパキと話された。我々 GDM group は何人？，活動の様子など矢次早にきかれてから今イスラエルに E.P. を土台にして英語教育の project を計画中だとのお話をきいて，今度はこっちとばかり，こゝのGDMを見せてもらいたいこと，reading materiel を見せてもらいたいこと，Trailer Vanを見せてもらいたいこと等希望をいった後，日本の GDM にとって Full English への橋渡し的材料に例えば *Outline History of the U.S.* の出版を，日本で許してもらいたいといったら，その面ではぜひ協力したいとの話だった。翌日は朝Longfellow SchoolでMiss Brownが外国人小学生20人を教えて with と together のデモンストレーションをしてくれた。生徒がアメリカに生活しているので発言は活発だが，やり方は我々と同じ要領であった。そこから，独立戦争発生地であるLexingtonをへて例のWaldenの池，Emersonの家，「若草物語」のオルコットが住んだ家，などを見にドライブ，すぐさまひきかえして再び Language Research Inc. で reading material を見せてもらった。

この日は Miss Gibson はお忙しくて，やっと夕方になって Miss Gibson にあえたと思ったら今Dr. Richardsが来られたから会いなさいといわれた。予想もしなかった機会だけに，喜んで階下に行くとそこはDr. Richards の部屋だった。外見からはあの哲学的意味論を書いた人には見えない，どこかその辺の田舎のおじいさん的な親しさを感じたが，話してみるとやはり学問のきびしさを感じさせる口調だった。日本のGDMの様子をもう一度話すと大変興味深そうにきいて下さった。そして，Miss Gibson と二人で EP にサインをして下さったりした。時間がないので意味論の話というよりはもっと具体的に Full English への橋渡し材料として *The Wrath of Achilles*, *The Republic* などBasic訳の自著を出して下さったり，もっと日本のGDM のことを知る材料がほしいなどと注文を受けたりした。その翌日は午前中に丁度巡回から帰って来たTrailerの移動教室を見た

これからも我々のグループは勉強するだけでなく，Dr. Richards にも大いにその活動ぶりを知っていたゞけるようにしなければと思い暖かい歓迎を受けたことを感謝しながら午後の汽車でカナダのモントリオールに向けて雪のボストンをはなれた。

86

EP で良い基礎を得たあとを，どのように発展させるか，そのための教材研究を，月例研究会ではつゞけてきました。こゝにあげた教材のうち，*True Stories about Bees, People in Livingston, An Outline History of the U.S.* は，こんど，われわれの研究会が日本における版権を獲得しました。こんごさらに，これらの intermediate stage の教材を開拓していく予定です。

Second Workbook of English

この本はEP.の後半即ち pp122～終の為のおのであるが，実際にはＥＰだけでは内容に比較して量的不足の感があるので，この本を単なる workbook とせずEPと同時に使うものと考えてよい。

先ず pp. 1～65は内容が一貫して Brown 家の子供の学校，Mrs. Brown の仕事，買物，夏休みの旅行等具体的に大変面白く書かれており，最後に backbone of U.S.A. を育てる education が不自然でなく印象に残るようにさえ感じられる。実際生徒はこれをwork-book とは考えず story として楽しみ乍ら読んでいる。それは story が面白いのと同時に文章に無理のない発展をしているからであろう。先に進むに従って文章も内容もそれに相応した程度のものとなっていて，生徒の理力との不均衡が見られない。その点でこの本は理想的であるが，少くとも中学２年生以上を対象としなければ無理である。

pp. 66～終はSee How Good Your English Is となっていて，EP 全体のまとめとしての文法的問題である。Preposition, conjunction, voice, narration, sounds, etc. を扱い，この中の word building などは習った語を大変面白く発展させることが出来る。

Vocabulary を見ると，EP にないものは skate, ski, triangle, library, hospital, penny, air mail, unable, Pacific Ocean, Gulf of Mexico, Greece, etc. 約50語であるが大体 international words, measuring words, proper words である。複合語は約10語，phrase は約15あるが各語の意味が正しく理解されていれば特別の困難は感じられない。

最初の Part I などG. D. M. の面目を最もよく発揮する部分ではないだろうか。Conjunction, participle, relative でつないだ長い statement が多いのに，読み乍ら絵を画いていくと空所が全部埋まり story を楽しみ乍ら問題が出来てしまう。余り短時間で出来た生徒の為に違った形式の question を出してみることもある（これは生徒の理解力を疑うわけではない。）とに角，先生，生徒共に楽しく有意義にやれる workbook であることを忘れないで頂きたい。（東山永）

A Second Workbook of Euglish (Cambridge, Mass.: Language Research. Inc., 1950)

"STORIES ABOUT BEES" をつかって

なによりも内容のおもしろさが読者をひきつける。生徒の反応はこの点では一致していた。この本を教えた相手は，英語がきらいでできのわるい高２と英語がすきでよくできる中３である。高２の方は正規の授業で副読本として使ってみた。話の筋を中断せずにスピーディに読むようにという「序文」とは反対に丁寧にやった。もっぱら recognition に重

87

点をおいたのに仲々進まない。例えば make clear では This water is clear からはじまる仕末だったからだろう。それでも黒板をフルに使って（もっぱら略図）読んだことを確認させていく。colored cards をもっていって授業をはじめると，自分が Karl になったようなサッカクにおちいることもたびたびだった。テーブルの絵を書いて，blue cards と grey cards をならべて，少しはなれたところに bees を書いておくと，生徒は They will go to the blue card. They will not go to the grey cards. などいう。最初の部分を十分時間をかけて，正確に理解させておくと，同じ pattern で話が進んでいくからよくわかるらしい。Karl, cards, bees, honey, の関係が黒板の図をたよりにイメージ化するからだろう。その点が英語がやさしいというだけでなく，この本の特長になっている。

もうひとつは中３の生徒との個人教授による印象である。黒板がないことと，verbalな level での実験もかねて，問答式を中心にして主語を変えていいかえをさせたり，絵を書かせたりしてみた。以上２つの試みはもっぱら読解をねらってやってみた。結果は良好だったとおもう。Exerciseの部分をもう少し充実すれば自習用の読物としておもしろく有益だとおもう。同じ形式の *Readers' Digest Reading* とくらべれば，どちらがストレートのウイスキーでどちらが水割りハイボールかすぐわかる。EPの既修者を対象に使うとすれば運用に重点をおいた作業がよいとおもう。

もちろん，両方とも読みとりに日本語の助けは借りなかった。　（矢ケ崎庄司）

An Outline History of the United States について

著　者　J.B. Wight

発行所　Language Research Inc.
13 Kirkland St., Cambridge 38
Mass., U.S.A

定　価　50¢（註文部数の多少で邦価には相当の開きがある）

これは Harvard 大学語学研究所で発行されたオフセット版39頁のアメリカ史の教科書である。序文に Gibson 女史が述べているように Basic words の中の約500語を学習し者を対象に，著者 Wight 氏外 G. D. M. 教授法に経験深い人達が実地に教室で繰返し試した上で出来たものである。

下記の12章にわけて簡明正確に政治色のない史実が述べてある。

I　Indians
II　The Coming of the White Men
III　Early America
IV　The Fight for North America
V　Trouble in the Colonies
VI　America Becomes Indipendent
VII　The Revolutionary War
VIII　The Constitution
IX　Expansion to the West, 1789–1860
X　Slavery
IX　The War between the States
XII　Expansion to the West after 186
the Growth of Industry

Vocabularyは上記500語の外に歴史を記述するのに必要ないくつかの単語が加えられている。Sentence patterns に関してはE. T. P. 又は L. E. L. 3冊を了った者に目新らしいのは perfect tenses (present & past) 位のものである。内容は比較的具体的な記述から抽象的な記述へと章を追ってよく grade されている。

私は L. E. L. 3冊を了った高校２年生と次のようなねらいで週に２時間読んでいる。即

ち，(1) direct method の延長として母国語を使わず読み，説明して理解させる。(hearing & reading) (2)英語で question に答え tests に答案を書かせる。(speaking & writing) (3) outline と銘うっているように極めて簡単ではあるがこれを通して米国史の概略を紹介し，より高度の歴史研究の基礎をつくり，米文学の歴史的背景を与える。このために Slavery の章を読む時に side reading として"Uncle Tom's Cabin" を課して生徒の興味を高めることができた。又(4)Expansion to the West という章で新らしい前の誕生について読む時は現在の米国の前の構成をはっきりさせるよい機会である。

高校程度の興味ある教科書としておすゝめする。　　（阿江美都子）

People in Livingston

おもしろいなかみの読物は，文章がむつかしいし，文章がやさしいものは，なかみが子どもだまし——というのが，いままでの教材だった。このような迷信をうちやぶってくれる一つに，この本がある。

Livingstonという町は実在しないし，そこのひとびとも，この本のなかに存在するだけだ。しかし，アレン女史は，やさしいパターンのくりかえしをたくみに利用して，わすれがたいひとびとをつくりあげることに成功した。

たとえば，第1章では朝おきると，お父さんは "Where is my gray suit ?" お嬢さんは "Where is my new green dress ?" 坊やは，"Where is my brown jacket ?" といって，台所でいそがしく朝ごはんのしたくをしているお母さんをなやませる。ここでは Where ? という questions, It's in～, It's at～, といった answers ばかりでつくりあげられている。第2章は Mr. Going-to-do というアダ名のおじさんが出てきて，彼はいつも "I'm going to wash my car." "I'm going to cut the grass in my garden." というばかりで，ちっとも実行しない人が出てくる。未来をあらわす be going to の練習に絶好である。

ここに特徴的にあらわれているように，これらのアメリカ人は修身の教科書的人物でなくて，まぬけだったり，矛盾していたり，しかも，いくつかのアメリカ人のタイプをよくあらわしている。Mr. Moore は「女はきれいな洋服をみせびらかしに教会へいくんだ。それが宗教かい」といって Mrs. Moore をいやがらせるところなど，じつに教養的価値がある。この本は約1000の基礎的な単語と，そのうえにくりかえされ，いつのまにかおぼえてしまう約600のあたらしい語で書かれているので，速読用の教材としても適している。また，巻末についているパターンを参考に，教室ではじめにパターンをとりだして，じっさいの situation にもとづくなり，pattern practice なりしてから，本文にはいるということもかんがえられる。また，いわゆるcontroled conversation 用につかうことも可能であるし，アメリカ人のものの考え方についておしえをたれるようにも使いたければ使える。

EP との関連いでえば，ＥＰ１にあらわれてこないが，使用ヒン度のたかい語なり，パターンなりを追加するのに絶好である。たとえば第9課でやるwant to (study), want (him) to(study), have to (study) などは，たいへんべんりである。この本ででてくることは，なにしろ，おぼえて損なことはひとつもない。　　（片桐ユズル）

89

GDM講習会——ことしは次のように行われます。7月22日（月）～27日（土）9：00 a.m.～正午まで。会場，ルーテル英語学校（千代田区富士見町1—16，(331)5266)。講師，阿江美都子（文化学院），片桐ユズル，升川潔（都立杉並高校），室勝（早大），吉沢美穂(ICU), Byron Black(Univ. of Texas)。入会費 ¥300，講習費 ¥1700。定員に達ししだい，しめきります。申し込みはルーテル英語学校まで。

夏休みの宿題などに最適の教材，*People in Livingston*（¥120），*True Stories about Bees*（¥60）ができました。同時に版権を獲得した *An Outliue History of the U.S.*，*The United States of America*（地理）も，ちかくできます。これで，いままで問題とされていた入門期から，よりすすんだレベルへの橋わたしが，一部解決したことになります。

升川潔さんがフルブライト計画で滞米中に奔走してハーバードで，Dr. Richards, Miss Gibsonそれからコロンビア大学でMrs. Allenにあって，そのおみやげのひとつとして，教材リプリントの道がひらけてきました。おしいことに升川さんは滞米中に節約してためたトラの子の $300を，ほかの紙屑といっしょにもして，お風呂にはいったらしいです。これをきいた吉沢さん，さすがは我が党の士だと。吉沢さん，阿江さん，渡辺せつ子さんたちも，たいせつなものを，もしたり，すてたりすることの名人なんだそうです。

吉沢美穂さんはイスラエルでおこなわれる英語教育の workshop（7月2日～18日）に参加することになった。これはイスラエルの文部省が主催してヨーロッパ，アフリカ，中近東の英語の先生たちをあつめて，GDMの方法をこころみるもの。アメリカからは，ハーバード大学のリチャーズ博士，ギブスン女史ほか2人が予定されている。

GDMの教材の御用は
タトル商会へ

Beginning American English ……¥520
Modern English (a self-tutor or class text for foreign students) ……¥520
Reading and Word Study ……¥610
English Through Pictures, ……*Book* 1 ¥220, *Book* 2 ¥170
Teacher's Handbook for English Through Pictures（新版）……¥400
A First Workbook of English（ポケット版）……¥220
First Steps in Reading English ……¥220
Anglophone Records for English Through Pictures,
Series I *and* II …… ¥5,000 each

東京都中央区
日本橋高島屋5階　チャールズ・E・タトル商会　電話 211—5029

90